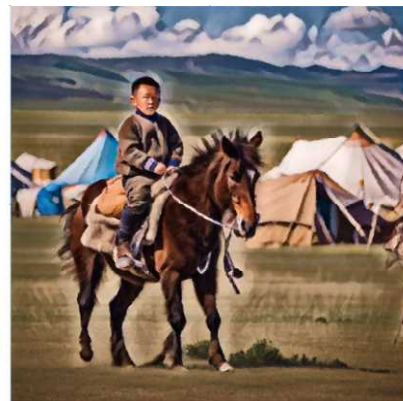


モンゴルの少年
あとがき

目次

モンゴルの 少年

高野敦志



モンゴルの少年

どこまでも草原が広がっている。白い点に見える羊の群れと、ゲルと呼ばれる円い家が、ぽつんと建っているほかは。夏の間は丘の上に、冬の間は丘の南側に引越す。モンゴルの羊飼いはキャンプをしているのだ。草原は誰のものでもないが、羊飼いにとっては庭のようなもの。草が枯れて餌がなくなると、一家は緑を求めて移動する。長い冬が過ぎ去り、若芽が一斉に伸び出す頃には、今まで枯れ草色だった大地が、緑の絨毯^{じゅうたん}に変わっていく。青い天井には雲一つ見えず、空は限りなく高い。隔てるものが何もないので、目に見えるものすべてが、仏さまから授かったものに思えてくる。

少年はまだ五歳だった。塩入りのミルクティーにパンを食べると、お父さんの馬に乘せられて、池の先にある向かいの丘へ進んでいった。羊を追っていくのは、ライオンみたいな顔したチベット犬で、オオカミも腰を抜かすほど勇ましい。

たてがみがなびく馬にまたがって、お父さんは不思議な声で歌をうたった。のどの奥から響く低い音に加え、口の形を変えていくことで、もう一つの高い音を出すのだ。まるでお父さんの中に、もう一人誰かが入っているみたいに。笛を吹くような声に、草原を飛ぶ鳥も耳を澄ます。馬も愉快になったのか、小走りで駆けていく。ホーミーは古くから伝わる歌い方で、それができるのがモンゴル人なのだ。

お父さんは日に焼けた笑顔で、昔話をよくしてくれた。モン

ゴルは今よりずっと大きな国で、ヨーロッパまで広がっていたこと、仏さまの教えが伝わり、むやみに人を殺すのはよくないと教わったこと、そのために戦いに弱くなって、今では国を引き裂かれてしまったことなど。

笑顔で語りかけてくれるのだが、心には静かな怒りがこもっているのを、子どもながらに感じていた。ただ、彼方まで続く草原を眺めていると、つらい歴史も夢物語のように思えた。世界の果てには、草原の海が広がっているんだ。少年にとっては、青い空と太陽の光、風だけが心の友だった。

ただ、来年は小学校に行かなければならない。羊たちと一緒に朝から夕方まで、日向ぼっこしていられるのも、あと一年ちよっとだろう。お父さんが飼っている五十頭の羊を眺めながら、

草の上に指でモンゴル文字を書いていた。

日暮れ前には、羊を追ってゲルに戻ってきた。中ではお母さんが夕食の支度したくをしていた。残り少ない肉をゆでるために、鍋にはお湯が沸かされていた。目が大きく鼻筋が通り、少女の面影は残っていたが、妹を産んでからは、身だしなみに気を遣う余裕はなくなった。働きづめになったせいかな、年よりずっと上に見えた。布に巻かれて眠っていた娘が、急に泣き出したので、胸をはだけてオッパイを飲ませている。

少年が物欲ものほしげな目で見てみると、正面の仏壇でお経を唱えていたおじいさんに、「カーン、こつちへ来い」と呼ばれた。観音かんのんさまの前で燃えているバターの灯明とうみょうは、香ばしいというよりすっぱい匂いがする。意味の分からない言葉を、何気なく口に

すると、おじいさんは満足そうに、毛皮で作ったばかりの帽子をかぶせてくれた。おばあさんはずっと昔に亡くなっていたので、ゲルに戻ってくると、おじいさんはいつも少年を脇に呼んで、モンゴルのお経を読ませようとするのだが、本当はお母さんのそばにいたかった。

夜になった。少年がベッドで寝ていると、お父さんとお母さんが何かで言い合いしている。少年が寝返りを打つと、二人の声は聞こえなくなった。

次の日も晴れていた。朝食の後、ゲルの外に出ると、お父さんがいつになくこわい顔をしている。今日はおじいさんが羊たちを、向こうの丘に連れていくらしい。チベット犬が駆けだし

たときだ。お父さんは一頭の羊の首にロープをかけた。羊は悲鳴を上げた。羊たちは振り返ると、逃げるように走りだした。

「おい、カーン、よく見ているんだぞ」

お父さんは羊の首を押さえた。お母さんが暴れる下半身にしかなかった。腰からナイフを取り出すと、胸の下にあるみぞおちを突いた。羊は一瞬声を上げたが、何が起きているのか分からないようだった。腕を突っ込んで血管を切ると、心臓を取り出した。羊はぴくりとも動かなくなった。

少年は立ち尽くしていた。涙が流れてきた。名前はつけていなかったが、いつも群れの最後についてくる、足の弱いオスの羊だった。お父さんの手は、羊の毛皮と肉の間を滑っていく。血は大地に一滴も流れず、羊は人間の赤ん坊のように、肉がむ

き出しになっていく。逃げだそうとすると、お父さんが怒鳴った。

「おまえが生きてるのは、羊の命をもらったからなんだぞ！」羊を解体していくと、血のにおいをかいだオオカミの群れがやってきた。お父さんは走りだすと、一匹のしっぽをつかんだ。体の大きなオオカミは、しっぽをつかまれると、いくら体を曲げても、人の手にかみつことができない。負け犬みたいに鳴くと、仲間とともに草原の彼方へ逃げていった。

その夜はごちそうだった。骨付きの羊を塩ゆでしたのが、テールに山と積まれていた。少年は手を伸ばせなかった。お母さんに手渡されて食べると、塩の甘みが肉汁のうまみを引き立てていた。もういいんだよと、あの羊が言ってるみたいだった。

悲しいのにおいしい。骨に食らいついて、髓^{ずい}まですること、羊の命を味わい尽くすのだ。羊とともに生きるとは、そういうことなんだと、少年は思い知らされた。

発電機の音が響いている。電灯の明かりが安定しない。ゲルにはテレビはなく、中古の大きなラジオがあるだけ。食事の終わりには、塩入りのミルクティーだった。中国語が聞こえてきたので、おじいさんはラジオを消せと言った。コップを手にとると、馬の乳で作ったお酒を、おいしそうに飲んでいる。少年は口を近づけて、ちよつとなめてみた。舌がしびれるような、でも、ほんのりミルクの甘い匂いがする。

おじいさんは笑いながら、少年の肩をたたいた。酔いが回ってくる、棹^{さお}の先が馬の頭の形をした馬頭琴^{モリンホル}を、長い弦で弾き

ながら歌いだした。

〜羊飼いの家に生まれ

緑の沃野よくやに育はぐくまれ

羊の命をいたたく

この大地に生きる者

草原をこよなく愛し

果てしない世界を治める者

ジンギス・カーンを祖と仰ぐ

モンゴル人に榮さかえあれ

おじいさんは仏壇から、茶色くなった古い巻物を取り出した。

何を書いてあるんだろう。墨の文字を読まされた。「ジンギス・カーン」という言葉だった。おじいさんは少年の顔をまじまじと見ると、巻物をするすると広げていった。その最後には、少年の名前がしるしてあった。

「カーンよ。おまえの名前の由来ゆらいが分かったか。カーンとは王、支配者という意味なんだ。おまえには偉大なる王、ジンギス・カーンの血が流れている。今は一介の羊飼いになってしまったが、おまえにはモンゴル人を率いていく力があるんだ。どんなにつらいことがあっても、そのことを忘れるんじゃない。誇りを持つことだ。それがおまえを導いてくれる」

雨上がりの昼下がり、隣のゲルから来客があった。隣といっ

でも、草原の彼方にあるので、少年は訪ねたことがなかった。馬で上ってきたのは、お父さんの友だちで、少年より二つ年上の息子がいる人だった。馬から下りると、背負っていた鳥かごを手に持ち替えた。ひげを生やしているので、ちよつとこわい気がする。お父さんが出てくると、肩を抱き合つてあいさつしている。

「ほら、みやげを持ってきたぞ」

おじさんはかごのヒバリを見せると、ゲルから顔を出したお母さんに招かれて、中に入つていった。

「カーン、お客さんの馬をつないでおいてくれ」

うちの一頭は杭くいにつながっていた。どこにと言わずに、お父さんもゲルに入ってしまった。客の馬は足もとに生えている草

を食べている。少年は細長い顔を見ると尋ねた。馬は首を縦に振っていない。その岩につなげばいいと教えてくれているみたいだった。

ゲルの中からお父さんが、こっちに來いと言っている。カーンは人見知りをする少年だ。聞こえないふりをして、ゲルの向こうにいる羊たちの方に駆けていった。その様子をおじいさんは、ほほ笑む表情で眺めていた。

しばらくして、話が済んだのか、お客さんは馬にまたがると、もと来た道を下っていく。池の脇を通り過ぎると、小さな点にしか見えなくなった。ゲルの中に入っていくと、お父さんがお母さんに小言を言っている。

「お客にあいさつもできなくて、おれは恥をかいだぞ。小学校

の話聞かせようとしたのに……」

横にはお客が持ってきた鳥かごが置かれていた。ヒバリも神妙そうに、じっとして動かない。少年はしかられるのでは、と恐れていた。お父さんはすぐに機嫌を取り戻すと、鳥かごをつり下げたまま、ゲルの外に出ていこうとする。少年も黙ってついていった。草原を進んでいくと、ヒバリは太陽の光を浴びて、元氣を取り戻したみたいだった。

「さあ、おまえは空に飛んでいけ。かごの中では、つらくて息絶えてしまうだろう。大空のもとで、思う存分鳴いてはばたけ！」

ピーピーピー、ピチピチピチ。ヒバリは首を左右に振り、高く低く飛びながら、一羽でさまざまな声を出している。少年は

耳を澄ませながら、心のわだかまりも一緒に飛んでいくのを感じた。

日は西の空で輝いていた。おじいさんがチベツト犬を促して、羊たちを連れて戻ってきた。夕食までにはまだ時間があった。何をして遊ぼうか。少年は馬をつないだ岩のことを思い出した。動かそうとして押したが、子どもの力ではびくともしない。一回り小さい岩をころがしていき、一頭の羊とロープでつないでみた。おじいさんは笑いながら、ゲルの中に入っていた。羊はもとより動く気がない。後ろからつかまえようとすると、のろのろと岩を引きずっていった。

そこで、ライオンの顔したチベツト犬を、ロープで岩につな

いでみた。オオカミと戦う強さを持つが、少年を弟のように思っている。犬は喜ばせたいと考えたのか、岩を引きずってぐいぐいと走りだした。少年も走ると、岩を転がしながら追いかけてくる。追いつかれた少年は、犬の大きな舌でなめられたので、鼻も口もべとべとになってしまった。勇ましくて優しい点では、人間の生まれ変わりみたいだった。

少年は他の動物でも試してみたかった。丘の下の池に駆けていくと、岸辺で昼寝している大きなカエルを見つけた。こいつなら岩を動かせないだろう。でも、死ぬか生きるかとなったら、ロープを切って逃げ出すかもしれない。少年は暴れるカエルを両手でつかみ、ゲルのそばまで連れてきた。日射しに当てられたせいか、カエルはすでに元気がなくなっていた。ロープをお

腹に回すと、先ほどの岩にくくりつけた。

「カーン、ごはんよ」

お母さんがゲルから顔を出した。少年は駆けていった。屋根に干してあったチーズが、テーブルの皿に山盛りにされていた。酸っぱくてちよっと固いが、かむたびにうま味が感じられる。お腹がいっぱいになると、遊び疲れたせいか眠くなった。そのままベッドに横になると、朝まで寝てしまった。

「カーン、カーン」

少年は目を覚ました。おじいさんの声だった。いつもは優しいのに、今日はこわい顔をしている。何かやってしまったのかな。おじいさんは少年の手をつかむと、ゲルから離れた岩の前に連れていった。

そこには少年が、きのうロープにつないだカエルが、干からびたように動かなくなっていた。あつ、忘れてたと思つて、おじいさんの顔を見上げた。

「おまえが何をしたか、分かったか！」

おじいさんはシャベルを手渡すと、死んだカエルを埋めるように言った。手を合わせていると、おじいさんは少年をゲルに連れ戻し、隅にあったロープを取り出して、柱にぐるぐる巻きに縛り上げてしまった。

お父さんは無言で眺めていた。お母さんはあわててなだめようとしたが、おじいさんは「自分がやったことを思い知らせるには、これが一番なんだ」と答えた。「許して！」と泣き声を上げて無駄だった。罪をつぐなわなければ、少年が将来不幸

になると、おじいさんは本気で信じていたからだつた。

草原の外で何が起こっているのか、少年はまだ知らなかった。新しい国造りをするというスローガンで、古い文化を壊す運動が始まっていた。文化大革命の嵐が吹き荒れだしたのだ。財産を持っている人たちは、土地や屋敷を奪われていった。内モンゴルの中心、フフホトでは多くのお寺が、壁を崩されて跡形もなくなり、お坊さんたちがどこかに連れ去られていった。

町から遠く離れた草原にも、時折、馬に乗った中国人が現れるようになった。お父さんは友達に会いに行くのをやめた。羊飼いの仕事以外は、何もしていいと見せる必要があったからだ。

やがて、役所から容赦のない通達が来た。お父さんはゲルの中に駆け込んできた。書類を渡されたおじいさんは、怒りで全身を震わせた。新しい社会に不要なものは、たとえ先祖から伝わったものであっても、捨ててしまうようにという命令だった。「モンゴル人のこと、何だと思ってるんだ！」

お父さんは声を荒げ、おじいさんはくやし涙を流している。

こんなもんじゃないが、おじいさんは書類を破り捨ててしまった。たとえ役人がやってきても、従う必要はないと言いつつ。お父さんはうなずきながらも、いずれはこのあたりにも、取り締まりの手が及ぶのではないかと恐れていた。

早くも秋の気配が訪れていた。草原はまだ緑色をしていたが、太陽の光は穏やかになり、目がさえるほど風が涼しくなった。

少年はお父さんの馬に乘せられて、村の小学校の入学式に出かけた。これまでのように、羊たちと一日草原で過ごせるのは、日曜日ぐらいになるのだろう。授業はモンゴル語で行われていたが、中国語の勉強もしなければならない。

太陽は西に傾いていたが、草原を緑の海のように映えさせていた。少年は馬に乘せられて、ゲルが見える所まで戻ってきた。日の光が目に入ると、頭がくらくらしてしまう。そのとき、お母さんの悲鳴が聞こえた。ゲルの前でおじいさんが、男たちと言いつ争いをしていた。中に入ろうとする若い兵隊を、おじいさんが押し返そうとしている。

お父さんは怒鳴り声を上げると、馬の腹をけって全速力で走らせた。少年は必死に手綱たづなにしがみついていた、走る勢いで振

り落とされそうになりながら。ゲルの中に入り込んだ男たちは、仏像や仏画^{タンカ}、お経を地面に投げ出し、足で踏みつけている。おじいさんはやめさせようとして殴られ、倒れたところを靴でけとばされた。一人が火をつけると、一気に炎が燃え上がった。

お父さんはおじいさんを助けようとして、踏みつけている兵隊を殴ったが、後ろにいたもう一人に横腹をけられた。男たちはばかにするように笑うと、おじいさんが大切にしていた巻物、ジンギス・カーンから一家^{いっか}までのつながりを示す系図も、引き裂きながら火に投げ入れた。

お父さんとおじいさんは、兵隊たちに縛り上げられてしまった。やめてくださいと、すがりついてお願いするお母さんに、つばを吐きかけた。男たちは「反革命罪」と言いながら、二人

を引きずっていった。ゲルの中では、布にまかれていた妹が、大声で泣き叫んでいた。

お母さんは少年を抱きしめると、二人を丘の彼方に連れ去る兵隊たちを、真っ赤な目でにらみつけていた。

平和な日々の終わりだった。数日後、お父さんとおじいさんは、帰宅することを許された。公安の取調は厳しかったが、政治活動をしている証拠は出てこなかったからだ。お父さんの顔には痣^{あざ}が残っていた。おじいさんは担架に寝かされ、お父さんと友達に運ばれてきた。ゲルの中でも眠ったままで、起こしても食事がのどを通らなかった。

半月ほどして、おじいさんはやせ細った姿で亡くなった。葬

儀の翌日から、少年はお父さんの馬に乗せられ、小学校に通うようになった。ゲルの中にいるよりは、気が紛れるだろうという配慮からだった。

次の春が訪れると、入植してきた中国人が、草原の周りの木々を切り倒すようになった。家を建てたり、薪^{たきぎ}として売るためだった。林はすかさずかになつていき、砂漠から黄色い砂が飛んでくるようになった。すっかり切り倒されてしまうと、風が強い日などは砂を巻き上げ、昼間でも夕方のように薄暗くなった。砂嵐の中では息をするのも苦しかった。

林が失われたことで、砂の波が押し寄せてきた。羊の食べ物は埋もれていった。追い立てられるように、一家は残された草地を求めてさまよった。少年は小学校に通えなくなった。不幸

は続くもので、羊たちの間で病気がはやりだした。口や鼻、蹄^{ひづめ}に水泡^{すいほう}ができて歩けなくなったが、獣医を呼ぶ余裕などなかった。伝染病は収まることなく、羊たちは次々に死んでいった。

草原での生活は、モンゴル人に生きる喜びを与えてきた。そこから切り離されることは、切り花のように根を失うことだった。お母さんは故郷に残りたがったが、子供たちを食べさせるには、他に方法がないというお父さんの説得に、従わないわけにはいかなかった。一家は仕事を求めて北京^{ペキン}に移り住んだ。石炭を燃やす煙で空は濁っており、外ではマスクをしないと咳^{せき}が止まらなかった。

お父さんとお母さんは、食品工場の労働者となった。中国語が下手なお母さんは、上司によく怒鳴りつけられ、夕食を作り

ながら涙を流していた。そこで、両親は少年がいじめを受けないうようにと、家の中ではモンゴル語を話さなくなった。小学校には少数民族の子も少しいたが、授業は中国語で行われていた。人民服を着るようになり、羊をゆでた料理ではなく、揚げ物や炒め物を食べるようになった。小学校を卒業する頃には、少年も妹も民族の言葉が話せなくなり、文字も書けなくなっていた。習慣がすっかり変わったせいで、一家からモンゴル人らしさは失われていった。

文化大革命が終結すると、中国の沿岸部では近代化が進められた。古い町並みは壊されて、高層マンションが建つようになった。改革開放が叫ばれて、人々は金もうけに目の色を変えるようになった。そうした風潮の中でも、一家は区画整理から取

り残された集合住宅で暮らしていた。

高校を卒業したカーンは、笑顔がすてきな青年になっていた。中国語をすらすら話し、冗談を言っては周囲を笑わせていた。友達の父親の会社で働くようになり、上司からもかわいがられた。社内の人気者になり、中国人のガールフレンドもできた。モンゴル人らしさは、容貌ようぼうからしか感じられなかったが、家族を思いやる心は人一倍強かった。

生活の水準が上がり、カラーテレビなどの家電もそろってきいた。人民服は着なくなり、服のファッションにも気を遣うようになった。以前と比べれば自由になったみたいだが、中国は言いたいことが言える国ではなかった。特に、少数民族は自分たちの文化について、公衆の前で話すことは避けなければならな

かった。国を分裂させかねないとして、モンゴル人には公安の目が常に光っていたからだ。

今まで海外に出ることなど、夢にも思っていなかったカーンだが、同じ高校の卒業生が留学したという話を聞くようになった。中でも日本は、外国人のアルバイトが認められていたから、数年間必死に働けば、家が建つほどのお金がかせげるということだった。カーンも初めのうちは半信半疑だったが、日本の大学を卒業すれば、中国と日本を行き来する仕事につけるという話に目を輝かせた。

父や母はもう若くなかった。妹も就職していたので、留学するなら今しかないと思った。家族やガールフレンドのことを考えると、迷う気持ちもあつたが、カーンは思い切って、両親に

日本への留学を切り出した。父は黙り込んでしまったが、しばらくして、息子の目を見つめて答えた。

「ここではおまえは、中国人として生きていくしかない。モンゴル人である前に、おまえは一人の人間なんだ。人生は自分で選ぶものだよ」

母は涙ぐんでいたが、カーンの手を握りながらうなずいた。「どこに行っても、私たちは家族なんだから」

会社の上司に話すと、ぜひ行ってこいと励まされた。両親と知人からお金を借りて、カーンは日本留学を果たしたのだった。東京は人や車が多かったが、ビルの間には青空が広がり、道路にもごみや吸い殻は落ちていなかった。トイレの便器は磨き上げられたように白かった。おじいさんが話していた極楽^{ごくらく}み

たいな国だと思った。カーンは都心の古いアパートを借りた。風呂もなく、トイレも共同だったので、日本の若者は見向きもしない部屋だった。そこでは、中国や韓国、タイなどのアジア系留学生が暮らしていた。中国にいた頃、日本人は鬼のようだという話を聞いたが、日本語学校の先生もアルバイト先の店長も、出会った日本人は親切で優しくかった。

大学の経営学部に進学したカーンは、奨学金が少しもらえたので、アルバイトの時間を減らして、授業に集中することができた。他の国から来た学生と交流したくて、留学生会に入った。そこでは思いきり中国語が話せたとし、家族から離れて外国で暮らすさびしさも紛らわすことができた。

夏休みも終わると、すでに九月の中旬になっていた。カーン

の通う大学でも、十一月の初めに学園祭が開かれることになっていた。留学生会の部室に行くと、そこでどのような催し^{もよお}を開くかが話題になっていた。

韓国人の女子学生は、チマチヨゴリを着て「アリラン」を歌い、チヂミを売ると言っていた。ネパール人の学生は、横笛を吹いたり、太鼓を叩^{たた}いたりして、民族の踊りを見せたいと言っていた。イギリス人の学生は、スコットランドのキルトをはいて、バグパイプを吹くということだった。実は、スコットランド出身は一人だけなのに、イングランド出身の学生が乗り気なのが意外だった。

「カーンも何か見せてくれない？ モンゴル人なんでしょ」
アメリカ人の男子学生に言われて、カーンは口ごもってしま

った。独立国のモンゴルから来た学生はおらず、内モンゴル出身の学生も自分だけだった。ロシアのキリル文字を使うモンゴルと違って、故郷では昔ながらのモンゴル文字を使っている人が多かった。ただ、子供の頃に北京に移住したカーンは、モンゴル語も話せないし、羊の料理も作れない。一人で二つの声を出す「ホーミー」もできない。民族衣装も持ってきていなかった。

「僕は中国人と一緒に、餃子と春巻ギョーザきを売るからいいよ」

そう答えながらも、チマチヨゴリに着替えた女子学生の笑顔にはととした。そんなことないでしょと言っているようだった。誇りを持てることなんかあっただろうか。そのとき、忘れかけていた幼い頃の記憶がよみがえってきた。彼方まで広がる草原

の中で、羊たちの群れを眺めている自分がいた。ゲルの中ではお母さんが羊の肉を塩ゆでしていた。ジンギス・カーンから続く一家の系図を、おじいさんが仏壇から下ろして見せてくれた……。

あの草原はどこに行ってしまったんだろう。草原は誰のものでもない。草が生い茂り、羊たちが群れをなすところが、モンゴル人の生きる場所だ。成人した自分が、民族衣装を着て馬にまたがり、羊の群れを追っている姿が、まぼろし幻のように浮かび上がった。本当はあそこにいるはずなんだと思った。そこに戻ることがどれほど難しいかは知っていたが。かつてのように草原で羊を飼いながら、豊かな生活を送るにはどうしたらいいのか。カーンは日本の大学で経営を学ぶ目的が、ようやく自分にも分

かった気がした。

あとがき

僕はこれまでに、中国内モンゴル自治区のモンゴル族の青年数人から、内モンゴルでの生活について話を聞いてきた。「モンゴルの少年」の主人公は、複数の人物の実話にフィクションが加わって生まれた。

現在、中国内モンゴル自治区では、漢族が九割を占め、モンゴル族は一割の少数派となった。以前は、モンゴル語による教育が認められていたが、現在では初等教育から中国語による授業が義務化されている。モンゴルの伝統文化が存続するかどうか、危機的状况にあるのだ。

一方、ソ連の援助により中国から独立したモンゴル国は、社

会主義化が進み、モンゴル語は従来のモンゴル文字から、ロシア語でも用いられるキリル文字に切り替わった。内モンゴルでは伝統的なモンゴル文字が使われているのとは対照的である。ただ、モンゴル国出身者と内モンゴル出身者が会話で苦労することはない。モンゴル国でも伝統的なモンゴル文字を学ぶ人は増えているという。

第二次世界大戦中、日本政府は内モンゴルの独立を画策していた。対中国戦を有利に進めるためだか、モンゴル族の中には日本軍への協力者がいて、それが新中国成立以後、とりわけ文化大革命の時のモンゴル族への弾圧につながったようだ。

内モンゴル出身のモンゴル族も、中国人として日本に留学しているが、大学で学ぶのは経済や経営、環境問題などが中心で

ある。モンゴル語やモンゴル文化の研究を望んでいても、分離独立主義者のレッテルを貼られるのを恐れて、ほとんどの場合は断念してしまう。

二〇二三年七月三十日

高野敦志